

キャサリン・マンズフィールド作

桃山まや訳

ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

第十二話 振り子のゆれ

下宿のおかみさんがドアを叩いた。

「どうぞ」とヴィオラは答えた。

「あなたに手紙だよ」おかみさんが言った。「大事な手紙のようだけど、おかみさんは薄汚れたエプロンのはして緑色の封筒をつまんでいた。

「ありがとうございます」ヴィオラは床にひざまずき、ほこりまみれのストーブの中を覗き込んだまま、腕だけを伸ばした。「返事があるのかしら？」

「いいや、使いの人はもう帰ったよ」

「そうですか」ヴィオラはおかみさんの顔を見ずに言った。家賃を払っていなかったのだから悪かったし、また怒鳴られやしないかとびくびくしていた。

「家賃のことなんだけどね」おかみさんが言った。

「神様、お願い、この人を追っ払って！」ヴィオラはおかみさんに背中を見せたまま、ストーブに向かって顔をしかめた。

「払うか、出ていくか、どっちかにしてもらいたいんだけど！」おかみさんは声を荒げ、怒鳴り出していた。「あたしは家主なんだ。人様に後ろ指さされるような暮らしはしていないつもりだよ。いいかい、この際だからはっきり言わせてもらうけど、ダニみたいな家具の隙間からこっそり入り込んで、何もかも食い尽くそうたってそうはさせないよ。家賃を払うか、でなければ今日にも出て行ってもらうからね」

ヴィオラはおかみさんのしぐさを見るといつも感じていた。おかみさんは、ふいに飛んできた汚い鳩を払いのけるような格好で、お手上げだねといった風に腕を突き出した。「なんて汚いばあさんなの！ ああたまらない！ 腐ったチーズと生乾きの洗濯物の臭いがする」

「ええ、わかりました！」ヴィオラはとっさに答えていた。「家賃はちゃんと払います、払えなかったら明日出ていきます。それでいいでしょ。だからそんなふうに怒鳴らない

てください」

それは驚くべきことだった。いつもはおかみさんが近づいてきただけで足が震え足音を聞いただけで気分が悪くなっていたのだから。それが、いざ顔を合わせてみると、かえって肝が据わってしまい、家賃の心配をしたり、おかみさんの罵声を恐れてドアも閉めずにこそそこそ出かけたり、一晚中部屋の中を行ったり来たりしながら、急に鏡の前に止まって、自分の惨めな姿に「お金が欲しい、お金が欲しい、お金が欲しい！」とつぶやいたりしていたことがばからしくなってきたのだった。一人でいる限り、貧乏は巨大な空想の山のようなものであり、それなりの痛みを感じながらも、彼女は山の上にしつかりと根を張っていることができた。しかし、ひとたびそれが現実となつて動き出すと、巨大な山はみるみるしぼんで、怒りと強い優越感を抱きながら「鼻をつまんで」一刻も早く通り過ぎてしまいたくなるような事柄になるのだった。

おかみさんはあわただしく部屋から飛び出すと乱暴にドアを閉めた。二人のやり取りを聞いていたのか、おかみさんの肩を持つようにドアが揺れてガタンと鳴った。

ヴィオラはその場にしゃがみこんで手紙を開いた。それはカシミールからのものだった。

今日の午後三時に会いに行く　長居をするつもりはない。要件は会った時に話す。僕より幸せでいてくれることを願う。

カシミール

「まあ！ずいぶん親切なこと！」ヴィオラは皮肉っぽく笑った。「なによ偉そうに。よけいなお世話だわ！」彼女は手紙を握り締めて立ち上がった。「それに、あなたの要件を聞くために、わたしが三時までここでじっとしているとは限らないのよ」けれど、彼女はそうするつもりでいた。どうしてもカシミールに会いたいと思った。カシミールならこの窮状を理解してくれるだろう……。「ほんとのところ、もう限界なの」ヴィオラはそつとつぶやいた。

午前十時。どんよりとした空から時おり薄日がさしていた。薄日に照らされると部屋の中がひどく汚れて乱雑に見えた。ヴィオラはブラインドを下ろした。けれど、白い光は部屋の中を醜く執拗に照らし出していた。生気が感じられるものといったら水差しにいたヒヤシンスだけ。それはおかみさんの娘がくれたものだった。ふっくらした花弁が、テーブルの上から強い芳香を放っている。つぼみをたっぷりとつけ、油を塗ったように葉を光らせていた。

ヴィオラは洗面台の前に立ち、エナメル引きの洗面器に水をためると、スポンジで顔と首を洗った。顔を水の中に入れて目を開けたまま左右に振ってみる。なんて気持ちがいいんだろう。ヴィオラはそれを三回繰り返し返した。「溺れるまで顔を浸けていられるかしら」彼女は考えた。「気を失うまでどのくらいかかるだろう……いつだったか、バ

ケツの中でおぼれた人の話を読んだことがあるけど、耳から空気が入ることはないのかしら　もし、この洗面器がバケツくらい深かったら　ヴィオラは試してみることにした　両手で洗面台につかまり、水の中にゆっくりと頭を沈めていく。するとまたドアをたたく音がした。あれはおかみさんじゃない　きつとカシミールだ。ヴィオラは顔と髪から水を滴らせながら、ボディスのボタンも止めずに飛んで行ってドアを開けた。見知らぬ男がドア枠によりかっていた　ヴィオラを見ながら目を大きく見開いて笑っていた。「失礼ですが　「こちらにシェーファー嬢はいらっしゃいますか？」

「いいえ、そついう人はおりませんけど」男の笑顔につられて、ヴィオラも笑いそうになった　さつきまでの嫌な気分はすっかり洗い流されていた。

見知らぬ男はひどく驚いているように見えた。「いいいですつて」　男は声をあげた。

「出かけているつてことですよね？」

「いいえ、ここには住んではないということですよ」ヴィオラは答えた。

「すみませんが　ちよつと　これを」男はドア枠から身体をはがし、まっすぐに立つと、灰色のコートのボタンをはずして胸のポケットから一枚の紙切れを取り出した。手袋をはめた指でしわをのばしてヴィオラにその紙切れを手渡す。

「ええ、この住所ですよ、間違いありません。もしかしたら番号が違っているのかもしれませんわね。御覧のように、このあたりには下宿屋が、それも大きなのがいくつもありますから」

濡髪から紙の上に滴がしたたり落ちていた。ヴィオラは吹き出してしまった。「いや　だわ、こんな格好で　ちよつとお待ちになって！」　ヴィオラはタオルを取りに洗面台に戻った。ドアはまだ開いていた……。けれど、もつ話すことはなかった。なぜ、ちよつと待つてくださいだなんて言ってしまったんだろう。ヴィオラはタオルを肩にかけてドアのところに戻った。まるで人が変わったように真面目な顔になっていた。「申し訳ありませんが、やはりその名前に覚えはありませんわ」抑揚のない声で言った。

見知らぬ男は言った。「そつですよ、残念です。ところで、「こちらにはもつ長くお住まいなんですか？」

「え　ええ　そうなりますかしら」ヴィオラはドアのノブに手をかけていた。

「それじゃ　「ごきげんよう。お騒がせしてすみませんでした」

「「ごきげんよう」

ヴィオラには男の足音が階段を少し下ったところで止まるのがわかった　煙草に火をつけているのだろう。ほら　おいしそうな煙草の香りが部屋の中にまで流れ込んできた。ヴィオラは鼻をくんくんさせて微笑んだ。なんて素敵なお会いだろう！　ものすごくお金持ちみたいだった。どつしりしたコートに大きなボタンのついた手袋。きれいなでつけた髪……。それにあの笑顔……。　「楽しそう」という言葉がびつたりだった

ちよつと世界を遊び場にしている太つた男の子といった感じだ。ああいう人は周りの人間を愉快的気分させてくれる　見ているだけでこつちまで別の人間になつた

ような気にさせてくれる。まともで、信頼がおけて、きつと生まれてから死ぬまで一度だってきちがいじみた衝動に駆られることなんかないのだろう。そして、人生はああいう人たちの手を取って　その膝の上で遊ばせている　それもまた当然のことだった。

ふとその時、ヴィオラはカシミールの手紙がしわくちゃになって床の上にごろがっていることに気がついた　ヴィオラの顔から微笑みが消えていた。彼女は手紙を見つめながら髪を編みはじめた　こみ上げてくる鈍い怒りを　頭の中に編みこんでいるかのように、頭の上にしつかり留めているかのように……。もちろん、あれは初めから間違っていたのだ。何が？　ああ、カシミールの真面目さといったら。彼女が幸せだったら、カシミールなんかには目もくれなかっただろう。けれど、あの時の二人は、まるで同じ病棟に入院している患者同士のように　相手の病気に慰めを見出していたのだ　そう、恋に落ちるには完璧なお膳立て！　不幸が二人の頭を鉢合わせにしたというわけだ。二人は顔を見合せ、衝突に驚きながらも、やがて同じ感情を抱くようになっていった……。

「少し距離を置いていて考えたら　なにかいい手立てが見つかるかもしれない。だって、あたしは本気でカシミールに恋をしていたのだもの……だめだめ、今度こそ自分に正直になるのよ」

ヴィオラはベッドの上に身体を投げ出して枕の中に顔をうずめた。

「わたしは恋なんかしていなかったんだわ。わたしは誰かに守ってもらいたかっただけ自分の作品が売れるようになるまで誰かに面倒を見てもらいたかっただけなのよ　そんな時、カシミールが現われて、ほかの男たちとのもめことからわたしを守ってくれた。カシミールがいなかったらどうなっていただろう。わずかばかりの蓄えを使い果たし、行き着く先は　そうよ、その「行き着く先」のことを考えての決断だったんだわ。カシミールにすぎるしかなかった。わたしはカシミールの才能を信じていたし、認められさえすれば必ず富を手にできると思っていたんだもの。貧乏暮らしともじきにサヨナラできるだろうと　なのに、カシミールったら、君がいてくれるだけでどんなに励みになるかわからない、なんて言うっておきながら……これが悲劇でなかったら、とんだお笑いよ。全く反対のことしか起こらなかったんだもの　カシミールは何カ月たっても売れるようなものが書けなかった　あたしだって人のことを言えた義理じゃないけれど　でも、わたしは自分のことは諦めていたんだもの。ええそうよ、わたしは計算高くて冷たい女だわ。才能のない男には愛も誠意も捧げる気にはなれないの。こんなふうに相手を軽蔑するようになったらもうおしまいね。残酷かもしれないけれど、自分を託すなら一流の男でなければ女のプライドが許さないのよ。なのにわたしったら、こんなみすばらしい部屋で、お金の心配をしながら、靴の底をすり減らして引き受けてくれそうな出版社を探しまわっているカシミールの帰りを待っているんだもの　惨めだったらないわ。貧乏のおかげでわたしはすっかり変わってしまった。わたしは貧乏を

するために生まれてきたわけじゃない　陽気で心配事などない人たちの間で花を咲かせるために生まれてきたのよ」

さっきの男の姿が脳裏に浮かんで　なかなか消えていかなかった。

「わたしにはああいう人がふさわしいんだわ　心配事なんかなくて　欲しいものは何でも与えてくれて、一緒にいると生きていることが実感できて、世間ともうまくやっついていけそつな気にさせてくれる人が、誰が好き好んで喧嘩なんかするものですかさつきはああ言っつてやるよりしかたがなかったのよ。わたしの中にだつて幸せの泉はあるのよ。こんな暮らしを続けていたら、そのうちほんとに涸れてしまつだろつ。このままでは死んでしまつ　そして」　ヴィオラはベッドの上に起き上がり、腕を伸ばした

「情熱がほしい、愛がほしい、冒険がほしい　ほしい、ほしい、ほしい。こんなところでぐずぐずしてなんかいられない　このまま朽ち果てていくのはいや」　ヴィオラは自らを奮い立たせるかのように叫び声をあげた。

「でも、今日の午後、カシミールが訪ねてきたときに、すべてを話し、『行つていいよ』と言われたら　あの人はきつとそつ言つだろつ　わたしはあの人のそついつとこるも大嫌い　なんでもわたしの言いなりになるんだもの　でも、そつ言われたら、わたしはどつすればいいの　いつたどこへ行けばいいの?」　ヴィオラには行くあてなどなかった。

「わたしは働きたくない　自分で自分の道を切り開いていくなんてまづぴらだわ。気楽で贅沢で何不自由ない暮らしがしたい。わたしには高級娼婦あたりがおあつらえむきの仕事なのかもしれないわね」けれど、ヴィオラにはどつすれば高級娼婦になれるのかわからなかった。かといつて街角に立つのは怖かつた　そついつ女たちがどついつ目に合っているのか知つていたからだ　病氣持ちの男　料金を踏み倒す男　そのつえ、毎晩違つ男の相手をしなければならぬ　いけない、そんなことを考えてはいけない。

「ちゃんとした着るものさえあれば、高級ホテルへ行つて、お金持ちの男を、そつ、さっきのあの人みたいな男を見つけるんだけど。あの人なら申し分ないわ。ああ、住所くらい聞いておくんだつた。あの人をその気にさせる自信ならある。一日中だつて笑わせあげ　わたしのために湯水のようにお金を使わせることだつて……」

そつ考えると、ささくれだつた気持ちがいくらか慰められるよつな気がした。立派な家や、ずらりと服の下がつたクローゼットや、さまざまな香水がヴィオラの目の前に浮かんだ。そこには馬車に乗り込んで　隣にいるあの男に思わせぶりの流しめを送つて　いる彼女の姿があつた　ヴィオラはベッドに横になつたまま、誰にもなく流しめを送つた　そして、心配事などなかつたかのように幸せな気分酔いしれた。それこそが彼女にふさわしい暮らしたつた。でもそつなると、カシミールには、このまま望みの薄い夢を追いかけてもらわなければならぬ　そして、そのすきに　ああ

そつだつた　明日の正午までに家賃を払わなければならなかつた。けれどヴィオラに

はまともな食事をするだけのお金もない。食べ物のことを考えたとたん、胃袋がきりきり痛んだ。しほりあげられるような痛みだった。ヴィオラはひどく飢えていた。なにもかもカシミールの責任だ。さっきの男は生まれたときからずっとこちそうばかり食べてきたというのに。あの男だったらどんなに贅沢な料理でも注文することができらう。このチャンスをものにしなければ。せつかく神様がヴィオラのために遣わしてくださった人を。みすみす手離すわけにはいかない。

「さっきの場面をもう一度やり直すことができれば、もっとうまくやれるの!」

戸口で言葉を交わしただけの月並みな男が、ヴィオラのなかで、うつとりするほど輝かしい人物に作りかえられてしまっていた。あの男ならきつと彼女を王女様のように扱ってくれることだろう……。

「粗野で品のない男は願い下げだけど、あの人はちがう。世なれていそうだし、あの謝り方にしたって……わたしには男をかしずかせるだけの美貌も手管もあるんだもの」……夢の中に何かが漂ってきた。あまい煙草の香りだった。そしてそのとき、ヴィオラは石の階段を下っていく足音が途切れたままであることを思い出した。まさかまだそこにいるなんて……そんなばかな。人生がそんないたずらをするはずがないけれど。ヴィオラはあの男がまだそこにいる気配をはつきりと感じ取っていた。彼女はあわててベッドの上起き上がった。ドアのフックから白いガウンをはずし、羽織ってボタンをかけた。その顔がいたずらっぽく笑っている。何が起きるかわからなかった。ヴィオラはただこう考えていただけだった。「面白そうだわ!」そして自分はあの男と楽しいゲームをしているのだと。

ヴィオラはドアの持ち手をそつとまわすと、目を細め、唇をキュッと噛みながら鍵を外した。やっぱり、さっきの男はまだそこにいた。手すりに寄りかかって立っていた。ヴィオラがそつと廊下に出ると、男はくるりと振り向いた。

「さあ、ヴィオラはガウンの前を合わせながらつぶやいた。「薪を取りに行かなくちゃ。ぶるるっ、なんて寒いのかしら」

「薪はありませんよ」男はたずねられもしないのにそう言った。ヴィオラは驚いたふりをして顔を上げた。

「あら、あなたでしたの」男の言葉をさらりと受け流しながらも、ヴィオラはそのおどけたまなざしと、健康なからだから発散されるさわやかな香りを感じて取っていた。

「薪がないってわめきながら、おかみさんがたったいま出かけて行くところをみたんですよ」

「嘘。嘘でしょ!」ヴィオラはそう叫びそつになった。

男はヴィオラのすぐそばまでやってきて、覆いかぶさるような恰好でささやいた。「タバコのつづきをあなたの部屋で吸ってもかまいませんか?」

ヴィオラはうなずいた。「そつなさりたいのならさびしそ……」

廊下にいた二人の上に奇跡が起こったのはまさにその時だった。

ヴィオラの部屋はすっかり変わっていた。心地よい明かりがさし、ヒヤシンスの香りが辺りを満たしていた。家具も見違えるほど立派になっている。子供の頃、パーティーでやったシャレードがヴィオラの脳裏を掠めた。片方の組が部屋を出てゆき、戻ってきたときに、一つの言葉を身振りで表すという遊びだった。ヴィオラは今、その遊びをしているのだった。男はストーブのそばへいき、肘掛椅子に腰をおろした。ヴィオラは男に話しかけてほしいとも、そばに来てほしいとも思はなかった。その男が自分の部屋にいるのを見ていただけでよかった。それだけで安心できたし、幸福を感じることもできた。こつこつ人がそばにいてくれることをヴィオラはどれほど望んでいただろう。彼女のことなど何も知らず。何も求めず。ただそばにいてくれる人を。ヴィオラはテールに走りより、ヒヤシンスのはいっただ水差しを抱きしめた。

「きれいだわ！きれいだわ！」ヴィオラは声をあげながら。花の中に顔をこすめその香りを胸いっぱい吸い込んだ。そしてヒヤシンスの葉越しに男に向かってほほ笑んだ。

「あなたは面白い人ですね」男は物憂げに言った。

「なぜ？ 花が好きだからですか？」

「あなたのような人にはもつと別のものを好きになってもらいたいな」見知らぬ男が言った。ヴィオラはピンク色の花びらを一つむしり取って笑った。

「ぼくからあなたに花を贈らせてください」見知らぬ男が言った。「そんなにお好きなら、この部屋いっぱいの花を贈りますよ」

ヴィオラは男の言葉にまごついた。「そんな、けっこつですわ わたしにはこれです」

「いや、それっぽっちじゃ」男はからかうように言った。

「ばかみたいなこと言わないで！」ヴィオラはそう思いながら男の顔に目をやった。よくみるとさほど感じのいい人間には見えなかった。目と目がくつきすぎているしひどく小さいことに気がついた。ヴィオラはぞつとした。まさかこの人がこれほどつまらない人だったなんて。

「毎日何をなさっているんですか？」ヴィオラはあわててたずねた。

「べつに何もしていませんよ」

「全く何も？」

「何かしてなきやだめですか？」

「いえ、そうじゃなくて。ただ、夢みたいなお話だなと思って！」

「どこが？」男は首を前に突き出した。「どこが夢みたいんですか？」やはり

否定できない。この人は馬鹿みたいだ。

「一日中シエーファー嬢を探していらっしやるんじゃないやありませんの？」

「いやあ」男はにっこり笑った。「まいったなあ！ 決してそんなことはありませんよ。

「そんな、乗馬だったらたまにします。馬はお好きですか？」

「ヴィオラはうなずいた。「好きですわ」

「じゃあ、僕と一緒に乗りにいきませんか　葦毛のいい馬を二頭持っているんですよ。どつです?」

「あの一張羅の帽子をかぶったら、葦毛の馬に映えそうね」ヴィオラはそう思った。「喜んでお供しますわ」彼女が簡単に承諾したので男は喜んだ。

「明日はどつです?」男が言った。「一緒に昼食をとってそれから乗りに行くというの
は」

どつちに転んだって　これは単なるゲームなのだ。「結構ですわ。明日は何の用事
もありませんから」

やや間をおいてから　男が軽く膝を叩いた。「ここに来て坐りませんか?」

ヴィオラは見ていなかったふりをして、テーブルのほうに歩み寄った。「わたしはこ
こで結構ですわ」

「そんなこといわないで　　またもやからかうような声で言った。「ここにきてわた
しの膝の上にお坐りなさい」

「そんなことできませんわ」きっぱりと断ったものの、ヴィオラは急に落ち着かない手
つきで髪をいじり始めた。

「どつして?」

「いやだからです」

「そんなこと言わないでちよつといらっしやい」　　今度は猫なで声だ。

ヴィオラは首を振った。「考えられませんか」

男は立ちあがって、ヴィオラのそばまでやってきた。「おかしな娘さんだ」男は腕を
伸ばしてヴィオラの髪に触れた。

「やめて」ヴィオラはそう言つと　　テーブルからすばやく身体をはなした。「も、も
うお帰りください」ヴィオラはひどく怯えていた　　「一刻も早く出て行ってもらいた
い」そう願うばかりだった。

「おや、わたしを追い返してもいいんですか?」

「ええ、お帰りください　　いろいろと忙しいもので」

「忙しいって。あんたみたいな娘さんがこんな所で一日中何をすって言つんです?」
「することならいくらでもあります!」ヴィオラは男を部屋から追い出し、ドアをぴし

やりとしめてやりたかった　　まったく見損なつたわ　　このろくでなし。

「そういえば、ここのおかみさんは何をあんなに渋い顔をしていたんでしょうねえ?」
男が言った。「なんだか心配事でもあるみたいだった」そして急に真顔になると、「あん

たがお金に困っていることは知っていますんですよ　　お金がいるんですよ?　　欲しい
ならあげるから」

「お金ですって!　　落ちつくのよ　　取り乱してはだめ」　　ヴィオラは自分にそう言
い聞かせていた。

「キスをしてくれたら二百マルクあげよう」

「なんですって！ キスなんていやよ 絶対にいや。お願いだから出て行って」

「いや あんたはキスをするさ」男はヴィオラの二の腕をつかんだ。ヴィオラはもがきながら、自分がどれほど腹を立てているかを知って驚いた。

「放して 放してったら！」ヴィオラは叫び声をあげた 男はヴィオラの背中に片腕を まるで鉄の棒みたいな腕を すべりこませて抱き寄せた。

「放して、何度言ったら分かるの！ ばかな真似はやめて！ こんなことをしてほしくてあなたを部屋に入れたんじゃないわ。よくも……」

「あんたがキスをしてくれたら出て行くよ」

どうかしている ヴィオラは男のにやついた顔をさけながら思った

「絶対にいやよ 誰があんたみたいな人でなしに キスなんかするもんですか」ヴィオラは何とか男の手から逃れると 壁に背中を押しつけて 喘いだ。

「出て行って！」ヴィオラはどもりながら言った。「いいいますぐにー」

その時、男の手から逃れたその時、ヴィオラはいいしれぬ喜びを感じていた。自分が発した怒りの声に酔っていた。「わたしがこんな男とまともにわたりあっているなんて」怒りに燃えた男は まくれ上がった唇の下から白い歯をむきだしにして まるで犬のように見えた。男がヴィオラに飛びかかってきた。彼女の背中を壁に押し付け 全体重をかけてきた。今度ばかりは身動きが取れない。

「キスなんかするもんですか。ぜったいにいや。あっちへ行行って！ 犬みたいなことしないで 女が欲しいのなら街燈の下にも行きなさいよ けだもの 人でなしー」

男は何も答えなかった。ばかばかしいほど真剣な表情でさらに強く押さえつけると、ヴィオラの顔も見ずに、鋭い声で叫んだ。「おとなしくするんだ おとなしくするんだ」

「もう、男ってどうしてこんなに力があるの？」ヴィオラは叫び出していた。「出て行って あんたなんかいらぬ。けだもの！ ナイフがあったら殺してやるのにー」

「ばかなまねはよせ 言うことを聞くんぞ！」男はヴィオラをベッドまで引きずって行った。

「あたしはあんたが思っているような尻軽女じゃないのよ」ヴィオラはそう叫びながら男の手袋にかみついた。

「何をするんだ！ 放せ 痛いじゃないか」

ヴィオラは噛みついたまま、心のなかで神様に感謝した。「神様、いい思い付きをくださってありがとうございます」

「放せ この雌狐め 畜生」男はヴィオラを振り払った。その目には涙が一杯溜っていた。「本当に食いちぎる気だったな」男は喘ぎながら言った。

「ええそうよ、本気で食いちぎるうと思っただよ。もう一度変なまねをしたらこんなも

んじゃ済まないわよ」

見知らぬ男は帽子を拾い上げた。「願い下げだね」男は吐き捨てるように言った。「いか、覚えてろよ おかみさんに言いつけてやるからな」

「ふん」 ヴィオラは肩をすくめて笑った。「こつちこそ言つてやるわ。あんたが部屋に押し入ってきて、無理やり乱暴しようとしたってね。その噛まれた跡を見たらどちの言い分を信じるかしら。あんたはシェーファーさんでも探しに行くのね」

ヴィオラは輝かしい勝利に酔いしれていた。彼女は男を睨んで言った。「今すぐ出ていかないのなら、もう一度噛むわよ」そして笑いだした。ドアが閉まっても、男が階段を下りていく足音を聞きながら、嬉しそうに部屋の中を飛び回っていた。

なんとという朝だろう！ とうとうやり遂げることができたのだ。戦って得た初めての勝利だった ヴィオラはたった一人で 獣を退治したのだった。彼女の手はまだ震えていた。ガウンの袖をまくると 腕に大きな赤いあざができていた。「この分だと脇腹にもあざができそうね。きつと身体じゅうあざだらけになるわ」 ヴィオラは「愛するカシミールに見てもらいたい」と思った。カシミールに対する怒りや嫌悪はいつのまにか消えていた。カシミールにお金がないのはどうしようもないことだった。なにもカシミール一人が悪いわけではない。ヴィオラにも責任の一端はあった。カシミールだって世間から取り残された状態で、必死に戦っているのだ。ああ、早く三時にならないだろうか。ヴィオラはカシミールに駆け寄り、その首に腕をまきつけている自分の姿を想像していた。「愛しているわ、あなた、わたし達だって今にきつと成功するわ。あなたのことまだ愛している？」「このところいやなことばかりだったの」